

## 第5回感想文コンクール【優秀賞】5作品

「失ったもの」

小学校6年生

私は、第三話の「五庄屋と小田與一」を読みました。読み終えて、「命」が強く心に残りました。

水が引けない。五庄屋と村の人々は困りはてていました。近くには大きな川があるというのに、村の人々は生活にひどく苦しんでいます。私がこの村の一人であつたら、五庄屋になんとかしてもらいたいと心から思ったはずです。それから五庄屋は、水路作りを計画しました。他の村からは反対の声もあがり、失敗したら、はりつけの刑にされる事になってしまいました。でも、五庄屋はあきらめません。私は、こう考えました。きっと庄屋達は、「村の人々を助けられるのは、自分達しかいない。自分がなんとかしなければ。」と、思ったはずです。

約四万人の労働者は、五つのはりつけ台を見つめながら必死に水路工事をしていました。

ちょうど工事が行われていたのが、一月だったからすごく寒かったと思います。手や足に、しもやけ、まめがたくさんできて痛かったでしょう。でも、もっとつらかったと思うのは心です。村人達は、自分達の命を一生懸命考えてくれた五庄屋の命は自分達しだいが変わってしまうことを、なやんでいたんじゃないでしょうか。

こんな詩を聞いたことがあります。

「一人は、みんなのために。みんなは、一人のために」

この詩は、村人と五庄屋にぴったりだと私は思いました。そして何より、水路作りが完成した時のみんなの反応は目に浮かびます。泣いて喜び合っている姿、五庄屋達に感謝の言葉を言う村人の姿など色々です。この事で昔の人は、自分の命も人の命もすごく大事にしているというのが分かりました。

日本がだんだんと裕福になっていくうちに、自殺や殺人が多くなった気がします。逆に日本が貧しかった時代は、何でも大切にしていました。今はどうでしょう。今は物があふれて、ごみもどんどん増えています。そして、そんなことから「大切にする心」を失い、自分の命さえも失ったのではないのでしょうか。

当時の人々は、生活が苦しいです。私たちがふだん食べている食事なども、ままならないじょうたいです。だから、自殺をしたいと思っている人に言いたい。歯をくいしばって生きろと。人のけん命に生きる姿が、どんなにいいかしれません。「命」を大切にしてほしいと思いました。

今も世界では、貧しく困っている人がいます。同じ地球上で生きているのに、私たちとはまるで違います。このことも「大切にする心」が必要だと思います。人を大切にできなかった人が人を捨てたのでしょうか。

私は、もう一度貧しい世の中になったらどうかなと思います、「大切にする心」をもう一度取り戻すために。

## 「恩」

### 小學校生

ぼくは、いつまでも、恩を忘れないポーランドの人がすごいと思いました。もし僕だったらと考える場面がたくさんありました。

この中で一番心に残ったのは、最後の両陛下のご訪問のシーンです。両陛下がポーランドに行かれて、アントニナ・リロさんの手をにぎったシーンが心にひびいています。とても長い年月がたっているのに、アントニナ・リロさんは、感謝の気持ちを忘れずに覚えていらして、感謝の気持ちを言えた事は、とてもうれしかったらうなと思いました。

この他に心に残ったシーンは、ある母と息子が奥地でひっそりと暮らしていて、医師のヤクブケビッチさんが見つけた時に、お母さんが息子だけでも救ってほしいとうったえた場面です。

その時ぼくは、「お母さんは強い」と思いました。

ぼくは、自分がもしそのお母さんだったら、そんなふうに言えただろうかと考えます。

そして、もう一つ心に残った場面があります。それは、ヤクブケビッチ副会長の言葉が七十五年という月日を越えて、その事が実行したという事です。七十五年前といたら僕のおじいちゃん、おばあちゃんもまだ生まれる前の事なのに、ポーランドの方達は、何年も語りつがれて長い月日がたっても忘れないでいて、「すごい」と僕は思いました。

何より僕が一番感動したのは、看護師の福沢フミさんの話です。フミさんは、五才の少女が腸チフスという重い病気にかかってしまい、その子につきっきりで看病されていました。

しかし、しばらくたって、少女に回復のきざしがみえはじめたのを見届けて、フミさんは、たおれました。腸チフスにかかっていたのです。そして、その方は、二十三才という若さで亡くなりました。という所を読むと胸がいっぱいになります。

「この人に治ってほしかった」と僕は思いました。

僕は、この本を読んで、恩は大切だなあと思いました。僕は今まで、人に何かを貸したり、助けてあげたりする事は、あまりしていないので、これからやっといこうと思います。

僕は、これから小学校を卒業するまでに、数えきれないくらい、失敗したらドンマイとってその人を責めないようにしたり、自分だけの物じゃない時にはゆずってあげたりと、たくさんの事をしたいと思います。そして、ポーランドと日本の様な関係を全部の国に築いてほしいと思います。

## 大和魂

### 小学校 6年生

私はこの本を読んだ時、ある詩を思い出しました。それは宮沢賢治の「雨ニモマケズ」。『欲ハナク 決シテイカラズ イツモシズカニワラッテイル』。その心が私達の先輩方にはあったんだなあ、と思いました。これはどのようにして人生を送るか、その人の生き方、その人自身につながっていると思いました。

私はその日、「子どもたちへ—歴史に学ぶ思いやりの心—」を悪戦苦闘しながら読んでいました。なぜなら、わからない言葉が出てきて、意味が書いてあっても理解できず、国語辞典を引っ張り出してきて読んでいたからです。1回読んだ時はさっぱりわからず、2回目ぐらいからなんとなく分かるような、分らないような。時間を置いて3回目にやっと理解できました。

私的にはどちらかという「郷土再発見」の方が興味がありました。「世界と日本」も好きだけど、少し難しかったからです。そこで、視点を変えて、地球儀でトルコやシベリア、ポルトガルなど地理的にどこに位置するのか日本とのきよりを調べたりしました。

一つ一つの実話を読んでいくと、必ず同じことが書かれていました。それは、「友情」や「愛情」。そして、人と人とのつながりが国境を越えて国と国との友好、交流に結び付き成り立っていました。昔の人達はとても心豊かで勇気にあふれ、人のために労力をおしまない奉仕の心が自然と育っていたんだなあ、と思いました。

「郷土再発見」では、千代子の生き方に強く心を打たれました。妻として、夫の役に立ちたいと夫につくし、心から夫を尊敬し、夫を愛し思いやる心はすばらしいと思いました。

「良妻賢母」、「大和なでしこ」とは千代子のような女性ことを言っているのかな、と思いました。現在、千代子のような女性は少なくなったように思います。日本は豊かになり、がまんすることや努力することに価値を見出せないで、楽で便利な生き方に走る自己中心的で外見ばかりを気にしたり、「何でもだれかがやってくれる」という考えが先行して相手のことを思いやれない人が増えているのだと思いました。

昔の人々の生活や教えには、目には見えないけれど、豊かですばらしい教養が身に付く学習があるし、人間として当たり前のことをすぐに行動に移せる強い意志と信念があると思いました。未来の日本人にこの思いを伝承していくためにも、今、私達が出来ることは何かを考えて実行に移していかないといけないと思いました。

私も千代子のような現代版「大和魂」を持った女性になれるように日々努力していきたいと思います。

## ポーランドと日本の美しい絆

小学校 6 年生

ポーランド。それは私が今、最も行ってみたい国の一つです。なぜなら、そこは私が大好きな作曲家であるショパンが生まれた国だからです。

私は、ショパンの曲を聴いたり、ピアノで弾くたびに、美しい中にもどこか物悲しさを感じます。ベートーヴェンやモーツァルトなど、ドイツやオーストリアの作曲家とはちがう、胸がキュンとしめつけられるような感じ…。それはショパンの故郷を想う特別な想いが曲の中にあっただからだと思います。ショパンの伝記を読んでも、ポーランドという国はロシアの支配下に置かれていて、独立したくてもできなかったこと、ショパンも祖国を追われるようにしてワルシャワを出て行ったことなどが書いてありました。でも、その時は、「ショパンがかわいそう」ということだけで、100年以上前の遠いヨーロッパでの話であり、なんとなく私たち日本人には、あまり関係のないことだと思っていました。

ところが、今回「ポーランド孤児を救った日本人たち」という話を読んで、その遠いポーランドと日本が、何度もお互いを助け合い、励まし合った歴史があることを知り、とてもびっくりしました。

日露戦争の時、ポーランド人はロシア兵として戦場に送られました。でも、ロシアからの独立を願い、ロシアが敗れた時こそ独立のチャンスと考えていたポーランド人は、戦うことに消極的で、むしろ進んで日本の捕りよになったそうです。当時の捕りよ収容所では、国際法で決められた以上に厚く保護し、ポーランドの人たちは感激したそうです。それから約10年後、ロシア革命による混乱によって、ポーランド人はシベリアに追われました。危機的な状態の中、親を亡くした孤児が多数難民となりました。救いを求められた日本は、わずか16日で救援を決定しました。腸チフスを発症した少女に命を捧げてまで看病した「福沢フミさん」など、当時の人々は孤児たちを必死に守り、765名のポーランド孤児を一人も死なせなかったそうです。

この時の恩を、ポーランド人は決して忘れませんでした。平成7年に阪神淡路大震災が発生した時、ポーランドはすぐに救援活動を開始しただけでなく、被災児たちをワルシャワに招いて励ましてくれたのです。この時すでに80才を超えていたポーランド孤児たちも、被災児を励ましにやってきました。それは、遠い昔、765名のポーランド孤児の命を助けた日本の先輩方の尊い行いが、75年の時を超えて日本の被災児に返ってきた瞬間でした。私は、昔の恩を決して忘れず、そのことを大切に思い続けるポーランドの人々の心は、とてもうつくしいなあ、と思います。

私が好きなショパンの祖国と私の国との間に、このような歴史的な深いつながりがあったことを知り、とても嬉しく思いました。

## オープンマインド ～世界に向かって～

### 小学校6年生

・・・世界に向かってひらかれた温かい心のようなものでしょう。

この言葉を読んだとき、何だかひきつけられる感じがしました。良い言葉だと思いました。世界に目を向け心を開く。助けの手を差しのべる。身近にいるよく知っている友達や家族にでさえ、行うことは大変なのに、世界に温かい心を・・・なんて、私にはできないことでしょう。でも、それをなしとげた人々がいるのです。しかも助けたのは、言葉の分からない外国の人、トルコの人です。

明治23年、日本を初めて訪問したトルコ使節団の乗るエルトゥールル号は帰国する途中に台風が直げし、沈没しました。この事故を知った近くの人々は救助活動を行って69人のトルコの人々を助けたのです。記録の様子から、すごく苦勞して助けたことが、ひしひしと伝わってきました。島の人々は、まず生きている人を海から上げて、海水で血を洗い衣服の帯を包帯として使い、60メートルものがけを上ったのです。それだけではありません。体が冷えきっているトルコの人々を島民は、自分の衣服を脱いで自分達の体温で暖めたのです。さらには、島では大切な食糧だった、にわとりを調理して食べさせたのです。

そこに困っている人々がいる、そこに理くつはない。なんて素晴らしいことができる人だろう。いったい、どれほどの気持ちが必要なのか。そう思いました。

このエルトゥールル号事件で友好は深まり、今度は日本人を助けてくれたのです。しかもそれを、当然のことをしたまで、と言います。このことも一つのオープンマインドなのではないかと思えます。

昭和60年。イラン・イラク戦争で、ある時イラクはイラン上空を飛ぶ飛行機はどれも攻げきすることにしました。タイムリミットまでに脱出しようとする、イランで働く人達で空港は混雑している思うように飛行機の座席がとれない中、トルコ航空機の第1便に200席、第2便は残った人数だけ、日本人に割り当ててくれたのです。

この二つの事件で共通しているのは、「救おうとする心」と「それを実行する心」だと思います。「救おうとする心」は日常生活でもよく湧き上がります。でも、その気持ちが小さいほど「実行する心」は湧きません。日常のことだったら、それほど難しいことはありません。でも、ことが大きいほど、実行の心は「実行したいと思う心」になってしまいます。それを考えると島の人々のようなことは私にはできません。でも、そんなことに負けずに「救おうとする心」と「それを実行する心」を育てて、困っている人がいればこの二つを思い出して本当にできるようになりたいです。